

42162

教科書文庫

4
810
42-1922
200030
1950

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

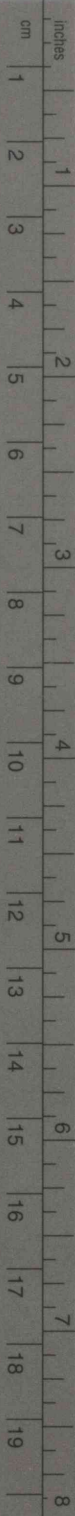


© Kodak, 2007 TM: Kodak

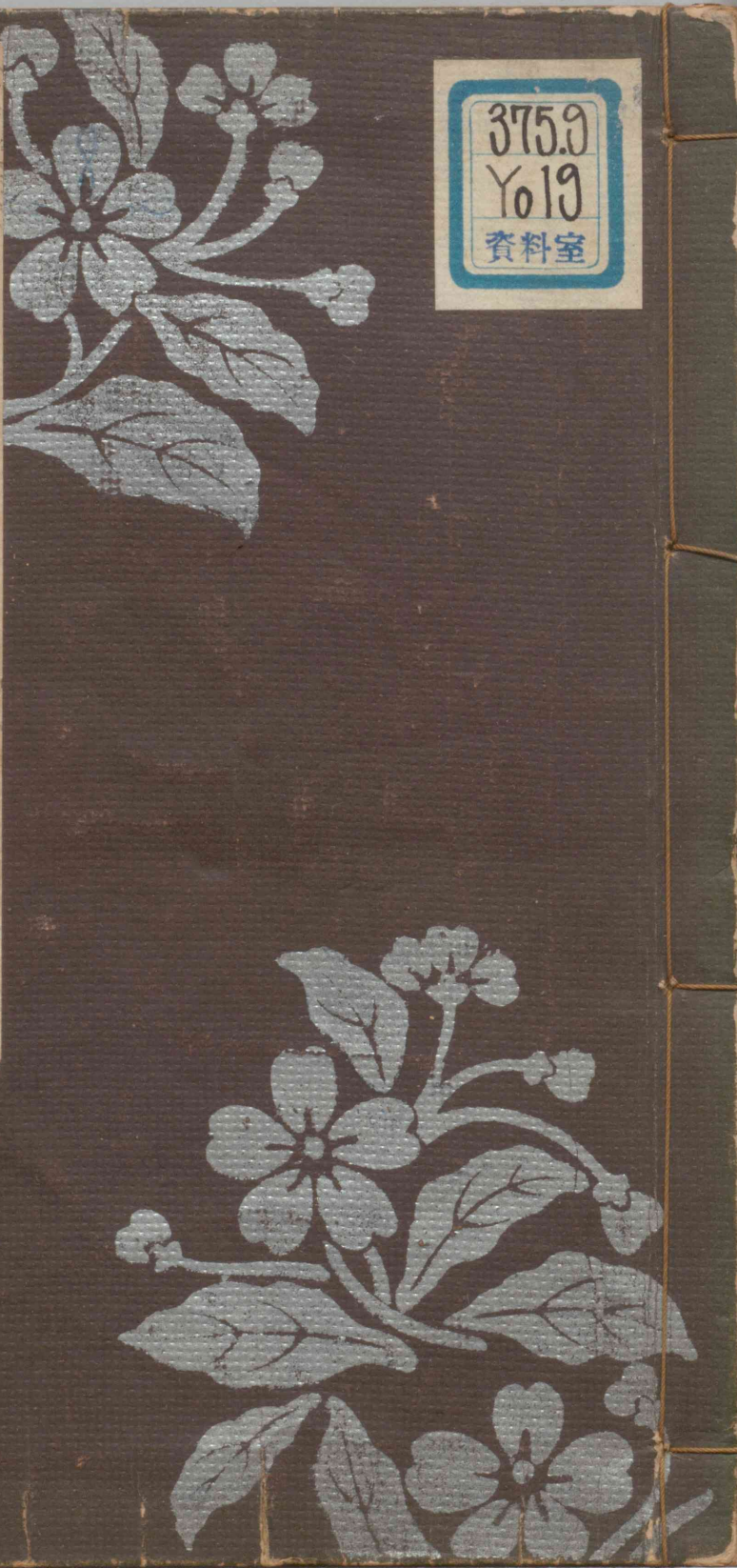
Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Y019
資料室



訂五
女子國語讀本

卷一



資料室

日八廿月一年一六正六

濟定檢省部文

書科教科語國校學女等高

3959
Y019

訂五 女子國語讀本 卷一

吉田彌平 篠田利英 共編
小島政吉 岡田正美

東京

金港堂書籍株式會社

昨文
一の巻の
存あり
の存あり

訂五 女子國語讀本 卷一

廣國花
春
目次



一	國花	芳賀 矢一	一
二	春	大和田建樹	六
三	姊に		八
四	燕	尾上 八郎	三
五	狗ころその一	長谷川二葉亭	四
六	狗ころそ之二	長谷川二葉亭	三
七	大原女		七

目次

一

八	深山の鳥	高濱	虚子	四
九	遠足			四〇
一〇	やさしの望	武島	羽衣	四〇
一一	目標			五
一二	人の運	大町	桂月	五
一三	飛行	岩本	周平	三
一四	雨	北原	白秋	七
一五	螢	渡瀬	庄三郎	七
一六	いさら川			七
一七	田園の夏	杉村	廣太郎	七

一八	住めば都			八
一九	家庭日記			八五
二〇	暑中見舞			九
二一	一番勝			三
二二	佐藤つる	井上	毅	五
二三	蜻蛉	志賀	直哉	一〇四
二四	明治天皇の御遺物	笠井	信一	一〇七
二五	乃木大将夫人			一一六
二六	秋の七草			一二四
二七	秋分	徳富	健次郎	一二六

二八	まことの愛……………	柳澤 淇園 三六
二九	海上日記……………	水上瀧太郎 三〇
三〇	箱根路……………	正岡 子規 三四



國文學者。
東京帝國大學教授。

五訂 女子國語讀本卷一

一 國花

芳賀 矢一

我が日本の國花として世界に誇るに足るものは櫻
 であらう。支那にも櫻桃といふのがあるが、逆も日
 本の櫻の花には及ばない。西洋のチェリーも實は
 大きい。花は面白くない。爛漫と咲亂れた櫻花の、
 山を埋め谷に満ち、雲とまがひ雪と見えるのは日本
 特有の美景である。

支那の國花は牡丹である。その濃艶な粧は美しいに相違ないが、あつさりとした日本趣味には適しない。香氣鼻を衝く薔薇の色も棄てがたく美しいものであるが、これも艶冶の態があつて、清楚人を動かす趣に乏しい。しかし、歐米人は薔薇を花の王と稱するのである。

日本の櫻はその色は極めてあつさりとして居る。但し、純白ではない、いはゆる櫻色である。その瓣は極めて薄い。一樹に無数の花を着けて、咲く時は、一時に爛漫と残りなく咲く。上品な大宮人の風もある。

櫻散る木の下の風は寒からぬ雪ぞふりける。

照りもせず曇りもはてぬ春の夜は、朧月夜にしくものぞなき。

り、野人の趣をも帯びて居る。深山・大都如何なる處にもよく調和する。二十日草の長い盛もなく薔薇の高い香氣も無いが、いかにも見事である。空に知られぬ雪と散つて來る趣は、殆ど言語に絶してゐる。日本の花の中の花は實に櫻である。

櫻の咲くのは春である。春の日本は水蒸氣が多い。どんよりと曇つて、寒くもなく暑くもない花曇の日、照りもせず曇りも果てぬ朧月夜は、霞か雲かとまがふ花には最もふさはしい。

春の特色は、どこまでも、駘蕩といふ點にあり、溫和な

所①にあり、峻嚴猛烈といふ心の微塵②もない所にある。



吉野山の櫻

櫻はこの時候に育③まれて咲出す花である。際立つた特色のない所が即ちその特色である。「うらく」とのどけき春の心より匂ひ出でたる山櫻花」といふ歌などが、最もよくその特色をあらはしてゐる。

八田知紀の歌。

「吉野山霞の奥は知らねども、見ゆる限は櫻なりけり。」

*松尾芭蕉の句。



上野公園の花

これは満山櫻に包まれた吉野山の景色を詠んだのである。「花の雲、鐘は上野か、浅草か。」これは満都花に掩④はれた大江戸の光景である。櫻は牡丹や薔薇の様な花瓣を賞翫する花ではなくして、樹として賞翫する花である。否、多くの樹を集めて、人は唯花の中に居て賞翫する花である。上から下を見て愛でる花ではなくして、下か

ら眺めて愛でる花である。東風吹く春の三四月、日
本人は暫し花の世界の人となるのである。(月雪花)

*國文學者、歌人。
明治四十三年歿す。

二 春

*大和田建樹

朝の聲

鶯しきりに鳴くは、うしろの藪なるべし。起きいづ
る頃は、春の霜半ば消えて、日影はや庭にあり。ねご
こちよき頃にもなれるかな。豆腐賣る聲は今ぞ門
を過ぐる。(新文林)

茶店の晝

一もと柳の垂れたるかげに、床几ならべて團子を賣
れり。すゝぶりたる釜の下焚きつくるは主の老婆
なり。腰かけて煙ふく客あり。日はまさに正午な
るべし。鶏一聲歌ひて、花は盆の上に散る。(藻鹽木)

村の夕

村また村の春の夕暮、櫻は大方過ぎて僅に遅き花を
残し、梨は到る處に盛にて、晴れたる日の雪のごとく、
西日斜に照して花とも云はず松とも云はず、霞み渡
れる景色の長閑けさ。菜の花の黄なると麥の緑な
るとに包まれて、晝のやうに立てる藁屋のこゝかし

こより煙、ほのかにたなびく。家の外に干したる布とり入るゝも見ゆ。流に鍬洗くわせんふ賤せんの女メは、田の中道を馬牽き歸る夫をや待つらん。(深山櫻)

三 姉に

皆さん御變りはございませんか。花子さんはもう這ひひくが御出來になりますでせうね。こちらは父上母上はじめ皆無事に暮して居ります。御安心下さいませ。

姉さん、私も高等女學校へ入學が出來ました。

今年はいつもより志願者が多かつたといふので、どうかと案じて居りましたが、試験がすんで揭示の中に私の名が出て居た時の嬉しさ。急いで内へ歸るなり、挨拶もそここに御母様に申上げました。その時の様子といつたら、丸で鬼の首でも取つて來た様だつたと、兄さんは御笑になるのです。兄さんだつて、中學へ入學の出來た時は随分御喜になつたではございませんか。

學校は姉さんの時分より教室も増し、運動場も

廣くなりました。運動の器械なども新しいのが出来ました。私どもは初の間こそ、それで面白さうに遊んで居る上級の方々を見てばかり居りましたが、この頃では、盛に運動をして元気に遊んで居ります。

大抵時間毎に先生がおかほりになります。小學校とは大分勝手が違ふやうな氣が致します。姉さん、田中先生を御存じですか。昨日運動場でテニスをして居りますと、先生が、「あなたの姉さんに春子さんといふ方があるでせう。」とおつ

しやつたには驚きました。

來週の土曜には遠足があるさうです。場所はまだ分りません。きつと作文の題になるだらうと、みんなが申して居ります。若しよく出来ましたら、御目に懸ひけませう。

内では毎朝學校の御辨當が四ついるので、御母様もなか／＼御忙しうございます。そのかはり夕飯の折は學校の話で持切です。御母様よりも宜しくとの事でございます。さやうなら。

*國文學者、歌人。
柴舟と號す。
東京女子高等師範學校教授。

四 燕

尾上八郎

都大路のあさがすみ
たなびきわたる青柳の
千本のみどりくぐりつゝ、
軒端に來るつばくらめ。

「初秋風にさそはれて
み空の雲に消え入りし
去年の鳥よ」と、われを見て、
語らふごととき姿かな。

はてしもわかぬ大海の
波の五百重のをちに居て
もとの主人を忘れざる
心をいかにしたゝへまし。

花ちり交るやちまたの
薫れる泥を含みつゝ、
今年も軒に巢をかけて、
はぐくみ立てよ、汝が雛を。

*名は辰之助、二葉亭四迷と號す。新開記者、文學者。明治四十二年歿す。

五 狗ころその一

長谷川二葉亭

ふと目をさますときやんくといふ聲がする。耳をすまして聽いて居ると、疑もなく小狗の啼聲だ。時々咽喉でも締められるやうに、消魂しくきやんきやんと啼きたてる其の聲尻が、聽てかぼそく悲しげになつてめいるやうに遠いく處へ消えて行く。と思へば、忽ち又近くで堪へきれぬやうに啼きだして、くんくと鼻をならすやうな時もあり、ぎやおと欠をするやうな時もある。

私は元來動物好で、わけても犬は大好だから、近處の

犬は大抵知つてゐる。けれども、こんなかほそいいたいけな聲で啼くのは、一匹も無い筈だから、不思議に思つて、そつと夜着の中から首を出すと、

「どうしたの。寐られないのかえ。」

と母が寝反りを打つてこちらを向いた。私は此の返答は差措いて、

「あれは白ぢやないねえ、阿母さん。もつと小さい狗の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄狗さ。」

「棄狗つて何。」

「棄狗つて。誰かゝ棄て、いつたのさ。」

私はしばらく考へて、

「誰が棄て、いつたんだらう。」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

何處かの人が狗を棄て、いつたと、私は二三度繰返して見たが、分らない。

「どうして棄て、いつたんだらう。」

「うるさいよ。などといふ母ではない、何處までも相手になり、其の意味を説明してくれて、もう晚いから、黙つてお寐」と、優しく言つて、又彼方を向いてしまつた。

私も亦夜着を被つた。狗は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるにつれて、父の躰が又耳に附く。

寐られぬ儘に、夜着の中で、今聞いた母の説明を繰返し繰返し味つて見た。まづ何處かの飼犬が縁の下で兒を生んだとする。小さな、むくくしたのが重なり合つて、首を擡げて、みいくと乳房を探してゐる處へ、親犬が餘所から歸つて來て、そのそばへどさりと横になり、片端から抱へ込んで、べろくと舐めると、小さいから舌の先で他愛もなくころくと轉がされる。轉がされては大騒して起返り、又よちく

と這寄つて、ぼつちりと黒い鼻面でお腹を探り廻り、漸く柔かな乳首を探り當て、あわて、ちうと吸附いて、小さな両手で揉みたて、吸出すと、甘い温かな乳汁がどくどくと出て来て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何とも言へずおいしい。すると、腋の下から、まだ乳首に有附かぬ兄弟が鼻面で割込んで来る。とられまいとして、産毛の生えた腕を突張り、大騒をやつてみるが、到頭とられてしまひ、又其處らを尋ねて他の乳首に吸附く。其の中にお腹も一杯になり、親の肌で身體も温まつて、融けさうな好い心持になり、

ついうとくゝとなる、くゝんだ乳首が脱けさうになる。夢心地にもあわて、又吸附いて、一しきり吸立てるが、直に又たわいなくうとくゝとなつて、乳首が遂に口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなり、一向正體がない。

其の時忽ち暗闇からもじやくゝと毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がぬつと出て、正體なく寐入つて居る處をむすと引摺み、宙につるす。驚いて目をぼつちり明け、いたいけな聲で悲鳴をあげながら、四足を張つて藻掻く中に、頭から何かで包まれた様で、眞

暗になる。窮屈で息が詰りさうだから、出ようとす
るが出られない。しばらく藻掻いて居る中に、ふと
足掻が自由になる。と領元を撮まれて、高いく處
からどさりと落された。うろくとしてそこらを見
廻すけれど、何だか變な、淋しい、眞暗な處で、誰も居
ない。茫然としてゐると、雨に打たれて見る間に濡
れしよぼたれ、怕しく寒くなる。身慄ひ一つして、く
んくんと親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。
途方に暮れて、よちく、這出し、雨の夜半を唯ひとり
温かな親の乳房を慕つて悲しげに啼廻る聲が、先刻

一度門前へ來て、又何處へかさまよつて行つたやう
だつたが、其が何時か又戻つて來て、何處をどう潜り
込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

六 狗ころその二

長谷川一葉亭

「阿母さんく、門の中へ這入つて來たやうだよ。」
と私が何だか居た、まらないやうな氣になつて又
母に言掛けると、母は氣の無ささうな聲で、

「さうだね。」

「出て見ようか。」

「出て見ないでも好いよ。寒いぢやないかね。」

「だつてえ。あら、あんなに啼いてゐる。」

とをりから絶入るやうに啼號ぶ狗の聲に、私は我知らずむつくり起上つたが、何だか一人ではこはいやうな氣がして、

「よう、阿母さん行つて見よう、よう。」

「本當に仕様がなない兒だねえ。」

と、口小言を言ひく、母も澁々起きて、雪洞を點けて起上つたから、私も其の後に隨いて、玄關と云つてもつゝ次の間だが、玄關へ出た。

母が履脱へ降りて格子戸の掛金を外し、がらりと雨戸を繰ると、颯と夜風が吹込んで、雪洞の火がちらちらと靡く。其の時小さな鞠のやうな物がつと軒下を飛退いたやうだつたが、聽て雪洞の火先が立直つて一道の光がさつと戶外にさし、雨水の處々に溜つた地面を一筋細長く照し出した處を見ると、つゝ其處に生後まだ一箇月も経たぬ、むくくと太つた、赤ちやけたいぬころが、小指程の尻尾をちぎれさうに掉立て、此方を見上げてゐる。なりは私が寝て居て想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡

れしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた、割合に大きい耳から雫を滴し、ぼつちりと兩の眼を青貝のやうに列べて光らせてゐる。

「おやく、まあ可愛らしい。」

と母もつい言つてしまつた。況や私は犬好だ。じつとして見ては居られない。母の袖の下から首を出して、ちよつくと呼んで見た。

すると左程畏れた様子もなく、ちよくと側へ來て、流石に少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、下からぐいぐい推上げるやうにして、べ

るべろと舐廻し、手をくれるつもりなのか、頬に圓い前足を舉げて、ばたくやつてゐたが、果はやんほりと痛まぬ程に小指を咬む。

私は可愛くてぐたまらない。母の面を見上げながら、少し鼻聲を出し掛けて、

「阿母さん、何か遣つて。」

遣るのも好いけれど、居附いてしまふと、仕方がないねえ。」

と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行つて、缺茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて

來てくれた。

早速履脱へ入れて之を當がふと、小狗は一寸香を嗅いで、すぐ甘さうに先づびちやくと舐出したが、汁が鼻の孔へ入ると見えて、時々くしんくと小さな嚏をする。忽ち汁を舐盡して今度は飯に掛つた。

他に争ふ兄弟も無いのに、頻に小言を言ひながら、がつと喫べ出したが、飯は未だ喰慣れぬかして、とかく上顎に引附く。首を掉つて見るが、そんな事ではなかく取れない。果は前足で口の端を引搔くやうな眞似をして、大藻搔きに藻搔く。

此の際に私は母と談判を始めて、今晚一晚泊めて遣つてと、雪洞を持つた手にぶらさがる。母は一寸溢つたが、もう、かうなつては仕方がない。阿父さんに叱られるけれども、言ひながら、詰り棧せん俵たな法師ほうしを捜して來て、履脱の隅に敷いて遣つた。それは好かつたが、其の晩啼通されて、私は些とも知らなんだが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。(平凡)

七 大原女

都の春の錦を織る賀茂の堤の柳の並木を出町橋の

*京都市の北、賀茂川と高野川と合する處にかれる橋。

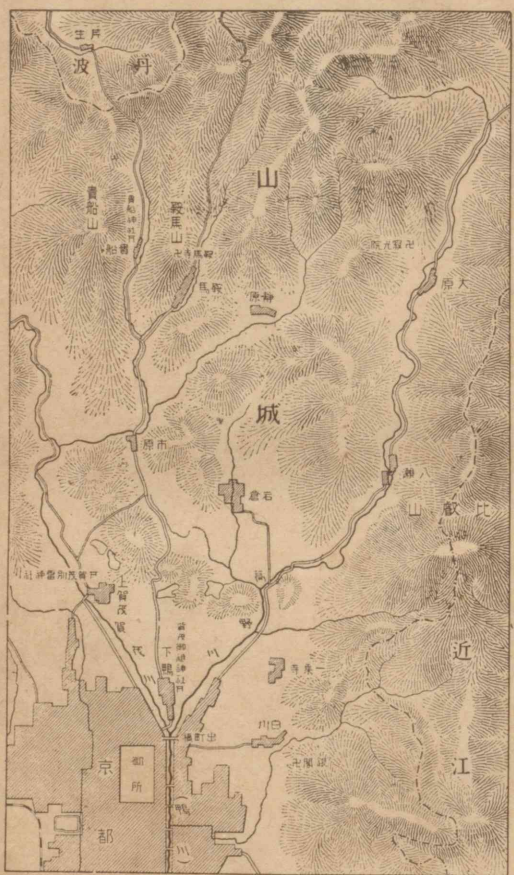
袂で數へ盡し、比叡の山の裾を廻つて清く流れる高野川の響を友としつゝ、北へ三里行けば、八瀬へ出る。八瀬の北には大原の里がある。

京の田舎の片ほとり、八瀬や大原の芹生の里。黒木買はしやんせんかいな。

と舞の歌に謠はれてゐる大原女の住みかは、この二つの村である。

大原女の服装は頗る詩趣に富んでゐる。黒木綿の着物に御所染と稱する白黒だんだらの帯を締め、縫取模様などのある三幅の黒い前垂をかけ、手には手

甲をはめて甲から前腕を覆ひ、足には脚絆を穿ち、足袋をはいて、其の上に小さい甲掛を着ける。その甲



京 都 附 近 地 圖

掛は草鞋の紐で脚絆や足袋のすれを防ぐ爲

だと云ふ。帯は一幅の布を五つ折にしたまゝで巻

付け、脚絆は皆前であはせる。これらは何れも木綿で拵へる。脚絆や手甲や甲掛は、白と黒と、二通りある。白いのは京行きと云つて黒木を賣りに出る時、黒いのは山行きと云つて薪採や草刈などに行く時に用ひる。

髪は投鳥田をぐつさりとおぶしたやうな結ひ方で、白地に山水の景色等を染めた手拭を風流に被り、こればかりを何よりの見えとして、縮緬やモスリンの丸ぐけの派手を襷をかけ、中には腰へ長い煙管を差して居るものもある。

かうした大原女の珍らしい風俗は建禮門院の侍女阿波内侍から始つたのだといふ。建禮門院は平相國の御息女、安徳天皇の御母君で入らせられる。壽

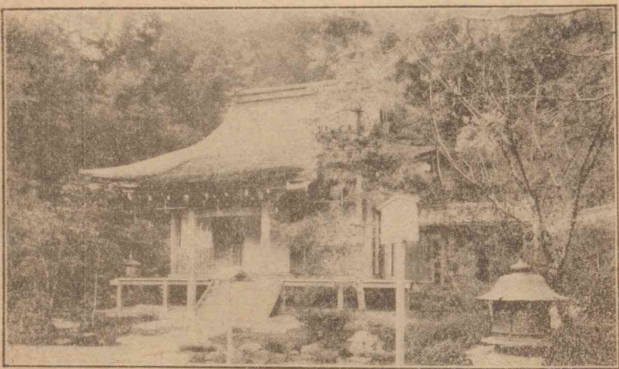


永の秋、平家の一門が壇の浦の藻屑と消えた時、門院も安徳天皇についで御入水

遊ばされたが、源氏方のものに救ひ上げられて京都へ御歸になり、尼となつて大原の寂光院へ入らせら

れ、天皇を始め奉り、平家一門の後世をお弔になつた。昨日にかはる片山里の佗住ひ、どんなに御痛はしい御有様であつたらう。仕へまつる阿波内侍も山に登つては黒木を折り、谷に下つては水を汲み、まめまめしく立働けば、膚は破れ、髪も亂れて蓬の様になる。其を恥ぢて、門院の御前へ出る時に頭を着物の袖で包んだのが、後に傳はつて手拭を被る風となつたといふ言傳へになつてゐる。

大原女の物を運ぶ様はまた一風變つたものである。何によらず頭の上へのせ、それを支へる爲に、手拭を被つた上へ輪を載せる。輪は頭にのる程な大きさ



寂光院本堂

て、丁度笠敷の様な恰好をしてゐる。山行きのは藁で作るが、京行きのは葦を用ひる。山から折つて來た黒木は軒端に積んで置いて乾かし、束ねた根元の方を前にし、先の方を後にして頭へ載せ、京へ出て大路・小路を賣歩く姿は誠に一幅の繪である。鐵漿つけた齒をもれる優しい賣聲、一日に一

里を歩き、十日に五里を行くと云つたやうな緩やかに足取。歴史の都、花の都の彩りの最も濃くしてふさはしいのはこの大原女である。香川景樹の歌に、
めせやめせ、夕げの爪木、めせやめせ。

かへるさ遠し、大原の里。(近畿國語讀本)

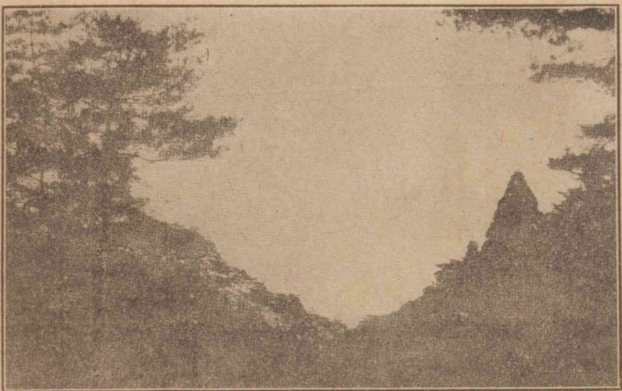
名は清。俳人、小説家。

比叡山東塔の宿院に泊れる日の朝。

八 深山の鳥

高濱 虚子

寢床を出て、齒磨楊子を使ひながら、湖水の見える部屋に行つて見る。朝日が部屋一面にさしこんで居る。湖水と思はれる邊は、雲ばかりで何も見えな



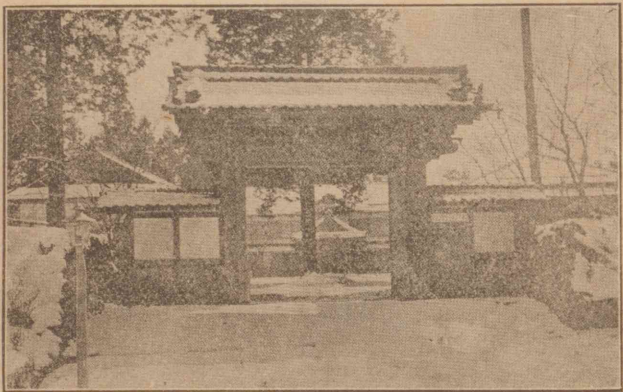
山 叡 比

富士の頂上から雲海を見下したのと似た景色である。部屋の下は、東谷になつて居るので、我が眼よりや、高く、や、低く、數知れぬ杉の梢が、鋸の様に突立つて居る。左手には北谷の向ふに當る峰が、鋸の齒の様な杉を背に並べて、湖の方に流れて居る。空氣が清い上にも清いので、近景の杉の梢も、遠景の杉の

森も新鮮な色をして居る。さうしてその間を薄い霞が流れて居る。非常に静かである。自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞えない。

只此の天地を我が物顔に啼いて居るのは小鳥である。何といふ可愛い聲の小鳥があるものであらう。名のわからないのが残念である。そこの杉の梢で一羽啼いて居る。彼方の杉の梢で他の一羽が答へて居る。遙か向ふの谷深く、他の一羽が應じて居る。よく耳を澄ますと、なほ二三羽の聲が、どこかで聞える様である。又その小鳥の合奏を破る様に、他の聲

の小鳥が、突然その間に高音を張る。前の小鳥ほど優しい聲では無いがまた、凛々しい處があつて、その音の空山に響く趣が何ともいへない。羯鼓の上に金鈴を落したら、こんな音が出もしようか。それも一羽では無い。三羽四羽と聞くらちに段々殖えて来る。前の小鳥が縦糸なら、この小鳥は横糸の様に、



比叡山東塔宿院

互に錯綜して、よく調和を保つ所が面白い。突然、けんくくとけた、まじい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば彼方の峰にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりも、やゝ急調である。多分山鳥でもあらうか。前の二つの小鳥で織りなした美しい絹を、たゞ一聲に引裂いたかと疑はれる。暫くしてその聲は、谷の底、峰の奥に浸込んでしまつて、その後は元の通り静かになる。眞先にその静けさを破つたものは鶯の聲である。絹に置かれる緋のやうに美しい。一つの緋が置かれると、また縦絲

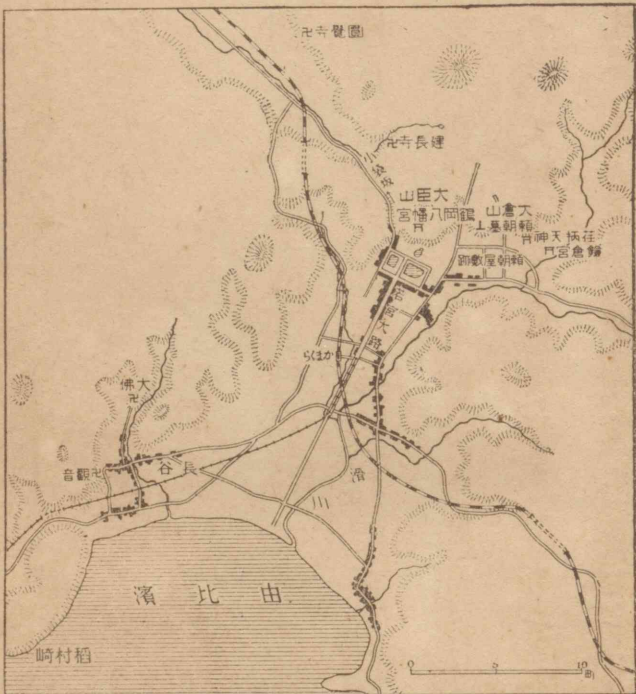
を織つて前の小鳥が啼く。また横絲を織つて次の小鳥が啼く。緋が啼く。縦絲が啼く。横絲が啼く。この絹をまた山鳥の聲が破るのかと思ひながら待ちまうけて居ると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似てゐて、谷の神社の鰐口が口をあけてつぶやくのかとも疑はれる。他の鳥の聲々がみな高調で晴々とした中に、ひとり低調で、不平らしい音を出すのが面白い。友は啄木鳥だらう。といった。二人の和尙は、山鳩だらう。といった。

琵琶湖の上には、まだ漠々たる白雲が漂つて居る。杉の梢を流れる霞は、少しづつ薄らいで来て、だんだんと谷が深く見えて来る。(新寫生文)

九 遠足

時しも五月の初めつかた、なごりの霜も置きつくして、裕の袂軽き頃、例年の如く我が遠足會は催されたり。今年は鎌倉巡りとして、心も一層勇み立ち、未明に起きて、弟と共に身支度し、ステーションへと急ぎぬ。同行十一人、若き叔父上、これが世話役たり。樂しき

車中は夢のごとく過ぎて八時過ぎる頃、汽車は早く



*鶴岡八幡宮の東に聳えたる山、高さ六十米。

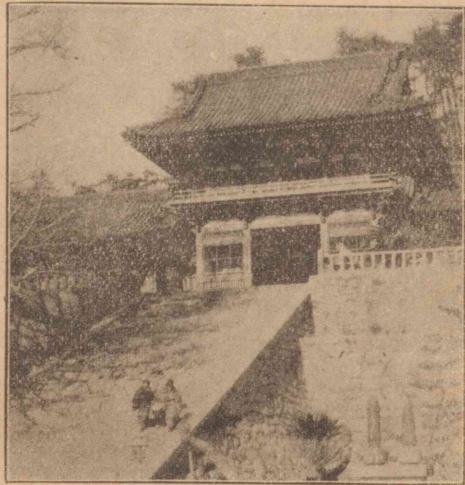
なり。と見れば八幡宮の朱塗の樓門は大臣山の青

*大和田建樹の
作。一時世に傳
唱せらる。

葉の中に輝けり。こゝより北六七町なるべし。宮
にむかひて行けば、大路の中央に一段高き道路あり。
之をだんかづらと云ふ。こは、昔頼朝卿が御臺所政
子御前の安産祈禱のために築かれたるものにて、頼
朝卿自ら工事を督し、御臺所の實父北條時政以下、在
鎌倉の大小名手づから土石を運びたりと云ふ。此
の道を歩む心地、さすがに憚り多けれど、いと嬉し。
かくて鳥居を過ぎ、橋を渡りて、石階を登れば、階の左
傍に大なる公孫樹雲を凌ぎて立てり。「別當公曉が
隠れし」と鐵道唱歌を歌ひ出せるものあり。石階

を登り盡し、樓門を入りて神殿を拜す。

神殿は南向きにして、山を負ひ、海に面せり。見渡せ



鶴岡八幡宮

ば、後の山より小山脈左
右に連りて、鎌倉の三面
を圍み、青葉、若葉紋を成
して、緑緞子の幕を張れ
るが如し。叔父上は指
さして、山脈の西端海に

突出でたるは稻村崎にして、新田義貞は彼の鼻を廻
りて攻入りたるなり。其の後の遠山は伊豆にして、

前面なる島は大島なり。など説明し給ふ。

こゝより東すれば頼朝屋敷に到る。もと鎌倉幕府の跡にして、今は別荘住宅にて建てつめたるが、十年前は一面の麥畑なりきといふ。奥なる大倉山には頼朝卿の墓あり。松風聲靜かに、苔の筵日暖かにして、こゝより世間の繁昌を眺め給ふらんと見えたり。それより鎌倉宮に詣づ。

鎌倉宮は大塔宮護良親王を祭れる宮なり。宮の後に、親王が足利直義に押籠められ給へる土牢なりと言傳ふる土窟あり。悲風陰々として、坐るに腸を斷

ち、憤りを發せしむ。吉野山にて親王に代りて死せし村上義光が小祠、及び御臨終まで介抱し奉りし南の御方の小祠あり。參拜を終へて八幡前に歸る。往復一里許なるべし。會員の元氣方に盛なり。こゝより建長寺までは半里に近く、圓覺寺へは一里に近しといふ。一同步調を整へ、進行の曲を歌ひて小袋坂を登る。建長寺にては、北條時頼五代時頼の像及び直徑五尺八寸の大太鼓を見、圓覺寺にては北條時宗七代時宗の廟に詣で、建築にて名高き舍利殿を見たり。何れも境内物古りて樹木森々たり。

圓覺寺門前の掛茶屋に暫く休み、木立深き處にて辨當を開き、水筒を傾けぬ。歸路は下り坂なれば飛ぶが如く八幡前を過ぎ、更にステーション前に歸りて、電車に乗り、長谷停留場にて下車し、長谷觀音を經、大佛の境内に入る。

鎌倉の大佛は建長四年の建立にして、長け三丈五尺、世界に聞えたる國寶なりとかや。殿堂は早くより廢れて、今は露佛にておはします。境内、今は遊園となり、昔のかたみとて大いなる礎石は此處彼處に遺れり。一行の人々、思ひくゝにその石の周圍に腰掛

けて休む。満園の葉櫻に若楓を交へて、涼しき言ふばかりなし。こゝにて一同繪端書を買ひて、夫々友

だちの許に出す。



鎌倉長谷大佛

遠足はこゝを終點として、午後三時すぎ、大佛通りを眞直に由比濱に出で、濱傳ひに若宮大路の方に歸る。

太平洋の浪は鞆鞆として吾等が足元を洗ふ。皆愉快と叫び、壯んなりと賞す。少年は浪を追ひつ浪に

追はれつし、少女は貝殻を拾ひて、歩みは更に抄らず。さすがに長き初夏の日も、太陽漸く稻村崎の方に傾かんとすれば、叔父上は一同を促して大路に入り、ステーションに到る。

吾等が汽車はさよならといふ如き響を残して進行せり。電燈の町々に輝く頃、汽車は吾等が驛に歸り着きぬ。いづれも元氣なほ盛なり。互に一日の愉快を語り、あつく叔父上に謝し、袂を分つ。幼き妹に贈るべき鎌倉細工と由比濱の貝とは囊に満ち、父母に語るべき話は心に満てり。

*名は又次郎。國文學者。歌人。文學士。

一〇 やさしの望

*武島羽衣

ゆふべの空を眺むれば、
浮きて漂ふむら雲を
嶺の嵐にはらはせて、
輝き出づる望の月。

心のまゝになるならば、
取りて飾りて、わが母の
朝の鏡にまゐらせん。

あしたの野邊を眺むれば、

小草・若草・百千草

たゞ一つらに生ひ立ちて、

寢よげに見ゆる青錦。

心のまゝになるならば、

聞きこにうつして、わが父の

夜のしとねにまゐらせん。

門の小川を眺むれば、

小さくやさしき音たて、

流るゝ水のその上に

散りてうかべる星の玉。

心のまゝになるならば、

取りてつらねて、わが姉の

髪かみの飾かざりにまゐらせん。

遠きかなたを眺むれば、

赤青紫あかあおむらさきとりまぜて

色美しく染めなされ、

高くかゝれる虹にじの綾。

心のまゝになるならば、
取りて仕立てゝ、わが妹の
はれぎの帯に與へてん。(國語讀本)

二 目標

一九一四年十一月二十六日から二十七日の朝にか
けて、今までランス^{*}附近に陣を布いて居た獨逸重砲
兵の一隊は、何處へか其の姿を隠してしまつた。佛
軍は盛に飛行機を縦つてみたが、容易に發見するこ
とが出来なかつた。いろくくと研究した末、小丘上

* フランスの東
北、白耳義の國
境に近き市街。

にある一農家に偵察兵を派して、敵軍を搜索しよう
と決したが、此の任務に就く者は、萬死の覺悟をしな
ければならなかつた。遂に幾人か志願して出た決
死の勇士の中から、二名の曹長を派遣する事となつ
た。

二人の曹長は林間を這ひ或は敵彈に身を暴して千
辛萬苦の末、遂に無事に目的の農家に忍び込む事が
出来た。それから、數分時経つてから、曹長は電話に
かゝつた。

「もしく、え、電線が無事に引込みました。はい、

二人は今納屋の中に隠れて居ります。獨兵は目前に居るのであります。此の農家の北、千五百米、地圖上に示してある山林を目標に照準して下さ

い。
味方の巨砲は轟然と轟いた。

「隊長殿、前面に落下。照準は猶百米前方。少し右方に過ぐ。左方照準。然り。其の邊。命中。命中。的確です。」

殷々轟々、我が軍の打出す砲彈に、敵兵は算を亂して僵れた。

「もしく、敵は非常に混亂して居ります。はい、私どもは納屋の中に隠れて居るので至極安全です。此の家の納屋の明り窓は敵軍の方に開いて居りますから、偵察には非常に便利であります。

十分許の間に、我が軍は敵の砲兵を殆ど撃碎してしまつた。すると、けたましく電話がかゝつて來た。隊長殿、砲撃中止。敵は山林から退却を開始し、今我が農家の方向に向つて移動して居ます。え、農家、私どもが居る此の家の方へであります。撤退。撤退せよといはれるのでありますか。併し、併し

若し私どもが退却してしまつたら、今後の報告はどうしませう。はい、いや、今しばらく止つて形勢を見たいと思ひます。納屋の中に居りますから敵兵に發見される事はありません。敵は今此處から三十米の處に砲列を布いて居ります。え、出發、撤退するのですか。あ、もう遅くありません。獨兵は庭の中へ這入つて來ました。なに構ひません。敵は全部用意を整へて陣を布きました。隊長殿。今であります。砲撃開始。目標は此の農家。いえ、私どもを目標にして砲撃して下さい。

一分の猶豫もありません。早く。目標は農家であります。

嗚呼、勇敢な兵士。隊長の身として斯様な忠勇な部下をどうして己れの砲弾で殺すことが出來よう。併し二人の兵士は殺しても國家をば救はねばならぬ。好し。二人の響は打つて遣るといふや否や號令一下。忽ち農家の礎も敵軍の砲車も激烈な佛軍の彈丸に碎け散つて、さしもの敵を見事に全滅させてしまつた。嗚呼、勇敢な兵士。其の電話の聲は今ほ戦友の耳に残つて居るけれども其の姿も、其の

農家も、最早影をも止めぬやうになつてしまつた。

(時局に關する教育資料)

*名は芳衛、文章家、文學士。

第二期

二 人の運

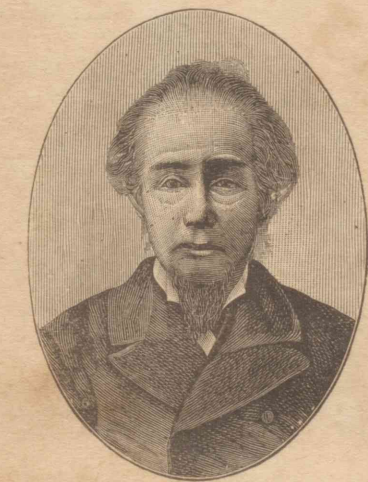
大町 桂月*

運は傍觀する人を去つて、奮闘する人に來る。世には碁を打ちて、負くれば腹が立つとて、自らは碁を打たずして、唯見物してこれを樂しむ者あり。岡目八目、その手は惡し、あそこはあゝ打つべし。などと、口ばかりは上手なれど、力量は一向になし。これにては十年傍觀しても、二十年傍觀しても、碁に上達すべく

もあらず。碁の如き遊戯はそれにて可なれども、人生にも往々傍觀的態度を取るもの多し。實行の如何を考へずして、唯大言壯語し、人の爲したること、を非難し、高慢なる事、生意氣なる事を言ひて、以て自ら街ひ、賢げなる事を言ひて、以て自ら高しとするが、ごとき人には、運は向いて來ざるべし。失敗は成功の基なり。好運を得んと思ふ者は、自ら渦中に投じて、奮闘せざるべからず。高見の見物は不可なり。彌次馬となつてわいゝ騒ぐとも、何の得る所あらんや、

名は安芳。政治家。伯爵。明治二十三年歿す。

勝海舟、壯時西洋式の兵學を學びけるが、一書肆の店頭（一）に當時得難き船載の兵書あるを發見せり。價五十兩なりと云ふ。海舟之を購はんと欲すれども、家



貧にして直ちに五十兩の金を辨ずる能はず。十數日間苦心慘澹の結果、漸く之を調へ得たれば急ぎ書肆（二）に行きて購はんとすれば、既に他人に購はれし後なり。海舟遺憾に堪へず。其の人を問へば、四谷大番町（三）に住める與力某なり。と

東京市四谷區。

*今の午後十時頃

いふ。乃ち其の家（四）にいたり、情を陳じて讓與せられたしと乞ひしに、與力聽かず。借覽を乞ひしに亦聽かず。海舟曰く、晝間は足下に必要あらん。されど夜間寢に就かれたる後は、我に貸しても可ならずや。と。與力止むを得ずして曰く、四つ時を過ぐれば貸しても可なり。されど、戶外（五）に持出すことを許さず。と。海舟辛うじて茲（六）に一點の光明を認めたり。翌夜より其の家（七）に赴く。當時海舟は本所錦絲堀に住めり。四谷大番町を距ること一里半もあり。然るに、海舟は風雨と雖も休まず、又一夜も其の刻を誤ら

ず。斯くの如きこと半歳餘、終に八卷の兵書を悉く手寫することを得たり。與力に向つて其の厚意を謝し、且寫本を出して、二三不審の點を擧げてこれを質す。與力感歎して曰く、僕膽寫の勞無くして未だ全部を通讀するに至らず。實に慚愧に堪へず。請ふ此の書を足下に呈せん」と。海舟固辭すれども聽かざれば、終に之を受けたり。與力は運を傍觀せるなり、海舟は奮闘して運を拾へるなり。(人の運)

一三 飛行

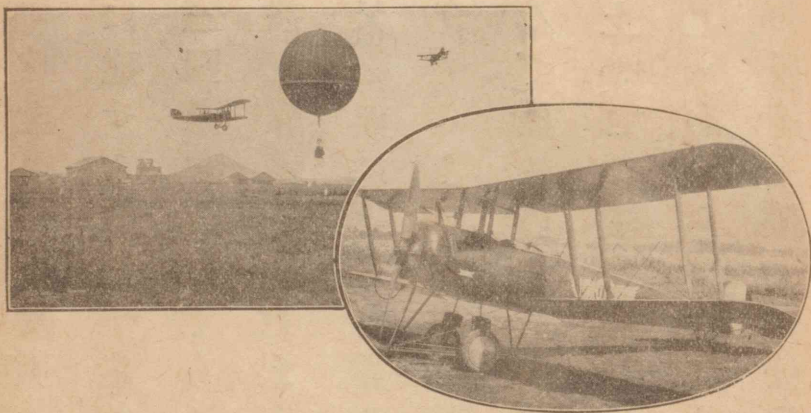
岩 本周平

*陸軍航空學校
研究部附陸軍技
師學士。

始めて飛行機に乗つた時は何時の間に地面を離れたのやら今どの邊に居るのやら、全くわからず、無我夢中でありませぬ。高い屋根、高い樹へ登つた時の様な心持は少しも致しませぬ、只やかましい發動機の音が聞え、風が烈しく顔に當るだけのことでありませぬ。はじめのうちは教官が座席に乗つて操縦するのを、後部に乗つて見て居るだけのものです。次第に慣れて來ると、練習生が座席に乗つて操縦し、教官は後に乗つて介添の役をします。更に進むと教官はたゞ同乗して視て居るだけであります。夫

から單獨飛行をし、空中滑走をし、發動機を止めて着陸する稽古をし、最後に野外飛行をして、夫で卒業するのであります。

飛行すると、空中で色々な現象に逢ひます。突風に逢ひますと、機は恰も小舟が波にゆられるやうに、下からどんと突揚げられて、次にすうと下り、再びどんと突揚げられて復すうと下るといふ様な工合で、尻が座席から跳ね上げられる事があります。山を越える時には、殊に烈しい突風にあひます。風が山の向ふから吹いて来る時には、風は山に沿うて登り、絶



機行飛葉複び及葉單

頂を越えると、又山に沿うて下るものです。今飛行機が山を越えようとして風に逆つて進みますと、機は吹下す風の爲に、如何に上げ舵をとつても上りませぬ。さて山を越えて反對の側へ行くと、今度は風が吹揚げるので、下げ舵を取つても容易に下りませぬ。富士山の近所はこ

の吹上げる風、吹下す風が烈しく、一秒十米程の速力に達することがあります。今日の飛行機は一秒に三四米の速力でありますから、この風に逢ひますと甚だ難儀を致します。

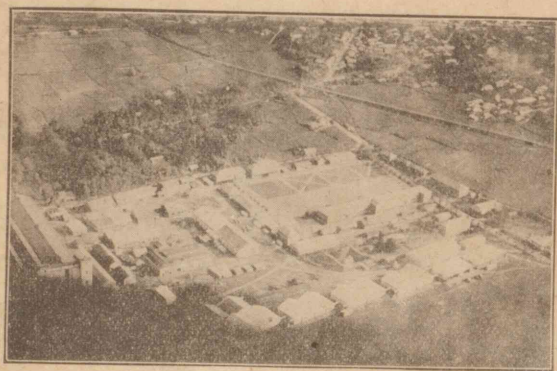
又、一面に平らな雲の上、所謂雲海に出ることがあります。この雲海で下を見ると、一面漠々、今何處を飛んで居るのか一向にわかりませぬ。山の上か、河の上か、この雲を突抜けて下へ行くと何處へ出るか、少しもわからず、實に心細いものであります。殊にかの所謂入道雲には常に強い突風が伴つて居ります。

大正四年八月十八日に、私の友人が雲の爲に危険に遭つた事がありました。朝の八時頃曇天で風も穏か、處々に小さな入道雲が浮んで居りましたが、飛行には好い日和でした。友人は高度八百米の處を飛行して参りましたが、眼前に小さな雲が出て居ります。平生の通りすぐ通り抜けられる積りで、其の雲の中へ這入りましたが、豫期と違つて、一寸の間には通り抜けられませぬ。前後左右一面に眞白な中を進んで参りますと、機は兎角下向になる様な氣がしたので、ハンドルを握つて頻に上昇しようと力めま

した。幾度も之を繰返してゐる中に、ふと横の方に雲の切れ目が見えましたので、見ると鐵道線路が垂直に立つてゐる。「はつ、機は横になつて居るな」と氣が附いた。其の時、雲は忽ち四方を蔽うた。相變らず舵を下げられる。力をきはめて頻に抵抗する。暫くすると、前面に雲の切れ目が見え、烟が自分の正面に直立して見えた。「やあ眞逆様だ」。知るや否や、力のかぎり上げ舵を引いた。ぶつんと針金の切れた音がした。萬事休す、墜落」といふ考が閃いた。同時に、今日は八月十八日だといふ考が浮んだ。由

埼玉縣入間郡所
澤町、東京市の
西北凡そ八里の

來所澤飛行場で飛行機の災難の起る日はいつも八



所 澤 飛 行 場

の日であります。夫で、此の刹那に友人の心にかやうな考が浮んだのであります。處がふと氣が附いて見ると、機は既に水平に飛んで居て、高度計は四百米を指して居りました。即ち友人は雲の中で四百米落ちたゞけで、幸に墜落を免かれたのであります。後で、附近の或農夫の話聞きま

したが、其の子供が「あれ、飛行機が落ちる。」と叫んだので、戸外へ出て見たら、最早低い處を平らに飛んで居たと申しました。これは入道雲の中に異様な氣流があつた爲に危難に出あつたのであります。

(學士會月報)

*名は隆吉。
詩人。

一四 雨

*北原白秋

雨がふります。雨がふる。
遊びにゆきたし、傘はなし。
紅緒のかつこも緒が切れた。

雨がふります。雨がふる。
いやでもおうちで遊びませう。
千代紙折りませう、疊みませう。
雨がふります。雨がふる。
けんく、小雉子が今啼いた。
小雉子も寒かる、寂しかる。
雨がふります。雨がふる。

お人形寐かせど、まだ止まぬ。
お線香花火もみな焚いた。

雨がふります。雨がふる。

晝もふります。夜もふる。

雨がふります。雨がふる。
(どんぼの眼玉)

一五 螢

渡瀬庄三郎

動物學者。
東京帝國大學教授。

螢は夏の景物である。夕方涼みながら川邊に立つて螢を見るのは誠に興のあるものである。

さて、螢は午後の八時頃から段々多く出て来て、十一時頃には最も盛になるのであるが、この時分になると、螢狩の人たちはもはやおほかた家に歸つてしまふ。出盛を見ないのは愚かなことだ。

呼ぶ聲は絶えて螢のさかりかな。

螢は始終光つて居るものではない。今まで樹に止つて居たかと思ふと、盛に光り出して、十分間ほど飛びまはる。すると、また樹に止つて光も淡くなるが、十分間ほどたつと、又飛びはじめ。午前一時・二時となると、皆樹の葉に静かに止つてしまひ、光もごく

弱くなつて、纔かに認められる位になり、そのあたりは殆ど眞の闇となる。けれども此の時もし一匹の螢が光を放ちながら他から飛んで來ると、今まで光らずに居た多くの螢が、これに應じて又一時に光を放つて、長くは續かぬが、その當座は再び近邊があかるくなるものである。これは一匹の螢が光り出すと、他のものが皆負けぬ氣になつて競争をするのかと思はれる。

そのくせ、螢は他の物の光をば至つて、嫌ふのである。これは、

あかりから暗がりへ入る螢かな。

とある如くである。それで、太陽の輝いて居る中は勿論、夜でも、月のあるとき、殊に満月の晩などにはじいつとしてゐて、飛びあるかない。たゞ樹にとまつて、淡い光を出してゐるばかりである。しかし、また闇夜に小さな光などが見えると、必ずその方へ飛んで行く。たとへば、螢を瓶に入れて振つて見せるとそこへ飛んで來る。これは螢であるから、さもあるべき筈であるが、螢には限らぬ。煙草を吸ひながら河の畔に居ると、やはり其處へ飛んで來る。尤もこ

れは螢のみが間違へるのではない。或時、螢狩に出
 掛けたところが、普通の螢とは少し色の違つた光る
 ものが來るので、是は定めて新しい種類の螢であら
 うと思つて、身構をして、あはや蟲捕網を被せようと
 したところ、それは螢ではなくて、大の男が巻煙草を
 くゆらしながらやつて來たのであつた。同類の光
 を目當に飛廻る螢でさへ、間違へるのだから、我々人
 間のまちがへるのは無理もない。
 それで、多くの螢は夜間の活動をすまして、夜明に近
 づくとき、だんく地面に近い方へおりて來て。

螢火や草にをさまる夜明がた。
 となるのである。(螢の話)

◎六 いさら川

清きなづのれのいさら川。袂もぐりた。
 いふ暑さ。さぞとぶちやう。イザヤをばな子。
 ころりてあはめて。終夜まごのひらりり。
 書を見よ。(箏曲集)

*楚人冠と號す。
東京朝日新聞記者。

一七 田園の夏

杉村廣太郎

家を大森の片はとりに移してより此に三年。四季毎に鄙の趣様々にかはりゆくが中にも夏ばかりめでたきはなし。

朝はまだきに起出づ。風涼しく氣清ければ、自轉車に打乗りて近きほどの東海道を走りまはる。行人稀にして、舞ひのぼる塵もなし。曉風身に沁みて、夏の半ばなるを覺えず。日影麗かなる時は、露けき野草踏みしだき行きて、潮を濱に浴ぶ。朝は水澄めれば、底の眞砂も數へつべし。鏡の如き海づら、彼方此

方泳ぎまはりて、汀に歸れば、水樓人晏くして、雨戸繰る音始めて聞ゆ。

歸りて、朝餐したゝむるに、必ずしも膳羞を須ひず。紫深き茄子の淺漬に、番茶の煮ばな、香いと高し。食卓を圍むもの、母と妻と二兒と伊豆より來れる少婢とこれに某生とわれとを加へて、合せて七人なり。

某生は夏季休業中來りて我が家に宿れるなり。時餘りあれば、更に冷水に浴し、さては、素跣足にて裏の瓜畑に水を注ぐ。さるべき暇なき時は、白麻の衣軽く着なして、直ちに東京に向ふ。八時十三分の汽

車を待合する人々、大森停車場のプラットホームに賑はし。知る知らぬ互に目禮して、昨夜は暑かりきなど語り合ふ。流石に都離れたる様をかし。晝少し過ぎて、家に歸る。さと水を浴びて、後午餐の膳に就く。清風徐ろに來るところ、庭の櫺の影濃かなるところ、遙かに沖なる白帆のゆきかふまた風情なきにあらず。

偶都より友の訪ひ來るあれば、舟を僦^{オヤト}うて灣内を漕ぎ、疲れて握飯を頬^オばり、澁茶に咽をうるほす。その快如何ばかりぞ。歸りて拾へる貝の汁をと、のへ

てもてなす。朝のうちに来べき八百屋の來らぬ折は、裏の畑の手作りの芋を煮て客に饗^{ウケ}す。

家の裏に十歩ばかりの荒地あり。夏至る毎に、自然生の蔓生じて、櫻の枝にわたり、楓の幹にかゝる。天僅かに曇りて暑さや、輕き時は、某生と共に之を掘る。掘りくゝて手も届きかぬるに至れば、大地に横たはりて、頭を半ば穴に埋めて、尙掘る。二尺ばかりなるもの二つを得れば、以て一家の食膳をみたすべし。乃ち海に出て泥まみれなる體を洗ふ。歸れば、薯^{オサモ}汁既に成りて我を待てり。

水を家の内外に撒き、一浴して都の塵と垢と汗とを洗ひたる後、夕飯の膳に就く。朝食に列れる人の一人も缺けず一日の務を終へて集り、情話食卓に満てるはうれし。

日暮れなんとするに、風益涼しく、氣愈清し。東の障子明放ちたるところより見おろせば、瑞々しき稻田のあなた、暮行く漁村の家々を隔て、白帆漸く消え、漁火次第に鮮かなり。幼きものは少婢に伴はれて畔道にさまよひ出でぬ。母と妻とは八雲琴などおぼつかなげにかきならず。われは庭の大樹にハン

モック懸けわたして、のけぎまに臥しつゝ、縁に出でたる某生と語る。仰ぎ見れば、星光愈明かに、樹梢をわたる風殊に涼し。垣を隔て、往きかふ村人の取りつくるはぬぎれ言、手に取るごとく聞ゆ。

夜更けぬれば、人聲やうく疎なり。時には鎮守の杜のあたりを掠めて杜鵑の啼くを聞く。臥床に入りやせまし、入らずやをらましなど打案じつゝ、書を讀むに、燈火を慕うて飛來る蟲の數々、一に蛾、二に金龜子、三に蟬、四に蜻蛉、其の外は名をだに知らず。月の出でたる、またなく嬉し。麗しき光を水に映し

て、水際の松林を離れゆくさまのをかしきにコト竊かに門を開きてあこがれ出づれば、同じ思の人のありてや、月下に横笛を吹きすさぶが聞ゆ。(へちまの皮)

一八 住めば都

住めば都。

禍も三年。

紺屋の白袴。

二階から目薬。

ござこのとまじり。

旅は道連、世は情。

論語讀の論語知らず。

能ある鷹は爪をかくす。

鷹は死しても穂はつまず。

長者の萬燈より貧女の一燈。

一九 家庭日記

七月廿一日(火) 曇。ご飯ごしらへ。

丁度五時に目が覺めた。愈、今日から、家事の實習。勝手に行くと、母様は笑ひながら待つていらつしや

つた。早速襪がけになつて、水を酌む、かまどの下を焚きつける、火をおこす、其の間味噌をずする。ついた筈のかまどの火が消える。餘り騒がしかつたのか、赤ちやんが眼をさます。母様はいつもとちがつて今日は少しも構つて下さらず、見てばかり入らつしやる。やうく御膳立の出來たのが七時半。これはしまつた。御飯に少し心が有る。

言ふは易く、行ふは難し。

七月廿二日(水) 晴。掃除。

七時に朝飯が濟んだ。後始末に一時間かゝつた。

八時にお掃除をした。拂ふ、掃く、拭く。濟んだのが十時。すつかり疲れた。座敷の隅は丸くは掃かなかつたが、花瓶を倒して床の間を水だらけにしてしまつた。

念には念を入れよ。

七月廿三日(木) 快晴。風。洗濯。

有ることく山のやう。岡田の姉さんの處からも、練習の材料だと言つてお取寄せになつて、都合十枚の洗濯物。始めの一枚二枚は丁寧に洗つたが、段々疎略になる。腰は痛む、手は赤くなる。着て居る着

物も洗濯した様に水だらけになる。母様はちよいちよいのぞきに來られる。皆干し並べ、見上げてほつと一息吐いた時は満艦飾と言ひたかつた。

我が身をつねつて人の痛さを知れ。

七月廿四日(金) 曇。涼しい。客來。

叔母様の御出。お手が鳴る。お茶を運ぶ。かれこれしてゐる中、兩親は中座して約束の處へお出掛になつた。あとを引受けて、叔母様の御相手は、随分苦しかつた。何も話がない。幸ひ學校の事を聞かれたので、少しは口がきけた。日頃のお饒舌も何の役

にも立たぬ。三十分ばかり過ぎて母様が御歸になつたので、胸撫下した。

渡に舟。

七月廿五日(土) 晴。暑い。子守。

「ねんくよう。おころりよう。赤ちやんは中々眠らない。髪の毛はなぶられる、汗は流れる。時々泣出す。こつちも泣きたくなる。見かけほど子守は樂なものでは無い。其の中赤ちやんもあきらめたか眠り出した。

子を持つて知る親の恩。

七月廿六日(日) 晴。暑い。蟲干。

天氣を目がけて蟲干。かうかけならべて見ると、中私の着物も多い。春夏秋冬が一時に一室に集つた。妹が珍らしがつて、まつはつて邪魔になる。此の襦袢は伯母様からの御祝、あの袴は姉様からの戴きもの等、幾年かの歴史が一時に思ひ出されて一つ心の中にこんぐらかる。

土用干、疊の上をまはり道。

七月廿七日(月) 曇。蒸暑い。畑作り。

朝飯前に俄百姓は裏の畑に立つた。鋤を持つ手も

覺束オカッなく、こはい様を手つきで肥料をやる。人が見たなら嘸をかしからう。抜くより生えるが早い雑草、これからは雑草と根氣比べ。休み中は草一本もはやしては置くまい。朝飯の料にとて葱ネギを抜く。流るゝ石に苔つかず。

二〇 暑中見舞

その時々トキトキの身勝手には候へども誠に冬の方遙かに凌しのぎ易く存候。今日の暑きこと、正午には早九十度を越し候。暑さを口實くわくとには御座な

く候へども、宿題は始めの豫定と違ひ、休は半ばを過ぎて未だ三分一も片附かず、朝夕の涼しき程になど、恃み居り候と我ながら恥かしく存候。御許様には、最早全部御濟ませにて、例の草花の御手入れに御明し暮しの事と存候。

久し振にての御歸省なれば、御家庭の御情味一入と存候。此方休暇と申しながらも別段變れる事も無く、折々は學校の庭なつかしく存候。先生方も多くは御歸省又は御旅行遊ばされ候由、御見舞狀差上度存じ、筆とり候へども、日頃の

^〇拙文惡筆とて書いては捨て、捨て、は書き、未だに其の儘と相成居候。それにつけても御許様の羨ましく存候。

御兩親様・御妹様によろしく聞え上げたまはりたく、母よりくれぐれもよろしくと申出候。あつさの折から御攝生專一に祈上候。かしこ。

第三學期

二二 一番勝

和田萬吉*

一番勝

平次「君の阿母様はいくつの時お嫁に來た。」

*國文學者。
文學博士。
東京帝國大學附
屬圖書館長。

源太「十八の歳に。」

平次「僕の方が勝だ。僕の阿母様は十七の歳に来た。」

藤三「僕が一番勝だ。僕の阿母様は僕が未だ生れな

い時分に來たのだ。」

いたづら兒

主人「三太郎は學校から歸つたか。」

下男「はい。」

主人「お前、あの兒を見たのか。」

下男「いゝえ。」

主人「どうして歸つて居るのがわかるのだ。」

下男「猫が先程から煖爐の下に隠れて居ますから。」

荷物

年よりも重い荷物を背負つたまゝで鐵道馬車に乗つて居た。車掌が荷物を卸して休むがよからうと言ふと、頭を振つて、

「どうして〜、わしが乗つたばかりでもいゝ加減に馬は重いだらう。せめて荷物だけはわしが持つてやる。」（新西洋笑府）

三三 佐藤つる

井上毅

* 梧陰と號す。文部大臣、二十八年歿す。

佐藤つるは岡山縣後月郡出部村の人なり。幼くして父みまかりければ、母と姉と三人にて世を送りけり。素より貧しき家なれば、母は二人の女を育てんとて、人に傭はれなどして辛うじて年月を経しが、憂苦の餘り、遂に精神の病にかゝりぬ。姉なる子は、愚にて、物の理を辨へず。つるは時にわづかに七歳なりしが、姉を勵ましつゝ、共に母の病をいたはりけり。されど、生計の道を得ること難く、一家殆ど餓に迫るばかりなりき。たま／＼憐みて糧を與ふるものあれば、つるは喜びてこれを受け、まづ母に捧げ、次に姉

に進め、尙餘りあれば、自ら餓を支へけり。

後に、母の病や、癒えて、姉は近村の人に嫁ぎければ、今はつる一人して母を養ひ、人の畑を借りて耕し、朝は、夙に出でゆき、夜は晩く歸り、風をも雨をも厭はず、男子に劣らず働きけり。畑に出でたる時も、時々は小走りして家に歸り、母の顔色を伺ひけり。天氣暖かなる時などは、前のふごに母をのせ、後に鋤、鍬の類を載せて弱き肩に擔ひもて行き、母をば田の畔、或は樹の陰に、いこはせ、おのれ其の傍に鋤を執りて母の心を慰めけり。

つるは平生[○]麗衣惡食に甘んじ、蓬髮に櫛をだにさ、
ざれども、母の好むものは、なにくれとなく求めて得
させけり。母年いたく老いて、夜、眠にえ就かぬを、つ
るは枕邊に侍り、ある時は背を撫で、ある時は肩を揉
みなどして、母の眠るをまち、さて、細き燈のもとに、絲
を紡ぎ、小車を繰りて、夜ふくるまで働きぬ。

ある人その孤勞を憐みて、夫を迎へば、などすゝめし
に、つるの云へるやう、他人を我が家に入れなば母の
心安かるまじ。母のいまさん間は、獨身にてあるこ
そよけれ。唯貧しき爲に心に任せぬ事の多かるぞ

うらめしき。とて涙に咽びしを、聞く人袖をうるほし
けり。事、官に聞えて、明治十八年十一月、縣令より金
若干を賜ひければ、つるは大いに悦び、これ父母の恩
なり。とて、直ちに歸りて母に告げ、又親戚隣里の人に
向ひて厚く恩を謝したりき。

明治二十三年六月、母の病おもりて、頼少く見えけれ
ば、つるは憂に堪へかねて、十日餘りは夜も睫を交へ
ずして、一筋にいたはりけり。母いまはの際になり、
つるを呼びて曰く、汝かよわき身ながら、長き歲月の
間家事を勤め、孝養遺る所もなし。今より後、汝は自

らの身を大切にし、又、汝の姉をいつくしみてよ。といふ。つるは、仰おほにやおよぶべき。心に懸おけさせたまふな。と答へしかば、母は眉まゆを開き、ほゝゑみてぞ身まかりける。時に年七十八なりき。つる、母の屍しに抱きつき、いたく悲しみ歎なげきて、人ごこち絶えぬるばかりなりき。

つるが日夜勤勞せし結果として、田圃二段までひらけて、その收と穫とせしものは衣食の料にあてゝ、なほ餘りありければ、それをばさきの縣令の賜とあはせて、郵便局に預けおきけるを、このとき取出して葬おの料

に充てけり。

さて、喪もをはりたるのちも、朝夕に香を焚たき、火を點じ、



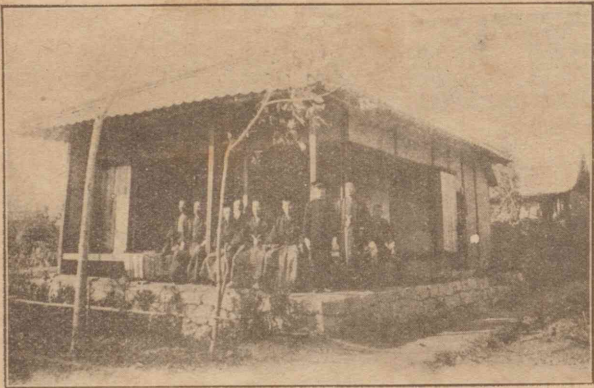
佐藤 正六 年九月 撮影

果物を供へなど、母の生けりし時のごとくにし、又、姉によく事へて、母の遺言をばあだにせざりけり。

つるは、かく孝行すぐれしのみならず、一家の主として公令を守り、田租、雜税といはず、掟おのまに、人ひとに先だちて納めけり。明治二十四年十二月、事雲の上

に聞えて、勅定の緑綬褒章を賜ひ、善行を表彰せられたり。
(梧陰存稿)

大正五年二月編者の一人、事を以て岡山縣に往き、途につるの郷閭を過り、その廬を訪ひぬ。つる時に年七十餘。愉色怡々として出迎ふ。懷舊の情話綿々として盡くる所を知らず。その言皆雙親鞠育の恩を追念するにあらざるはなし。終りに、恭しく一の笹折を捧げ出でて、曰く、昨秋御大禮の節、緑綬褒章を佩ぶるが故に、辱くも召されて賜饌の末班に列せり。是わらは一人の私すべきに非



佐藤つる再築家屋

ず。修學旅行の途次、茅屋を訪はるゝ女學生などに一粒づつ薦めて當日の光榮を頌つなり。と。見れば、強飯搗栗切鯛などの乾からびたるが半ば残り。何ぞその志の優しきや。つるの家嘗て焼けぬ。有志相謀り、廣く全國の女學生に募り、たちどころに千餘金を得て、再築の工を竣へぬ。亦孝感の致す所なりと謂ふべし。

こゝに掲ぐるもの即ちその寫眞なり。

蜻蛉幼虫 ヤシノミ

*
文學者。

三三 蜻蛉

擬人法

*
志賀直哉

暑い。今年の暑さは不自然にさへ思はれる。庭の紫陽花が、木一杯に豊かにつけた美しい花を、さも重さりに垂れて居る。八手は葉の指を一つくとして居つぼめて、烈しい太陽の熱を避けようくとして居る。今年八手の根元に植ゑた鬼百合は、まさかこれ程の暑さが来ようとは思はなかつたのだらう、ひよろひよると四五尺も延びて、今はそれを後悔して居

る風である。莖は蕾の重みに堪へず、蕾の尖つた先を陽炎の立昇る乾いた地面へつけて、じつとしてゐる。それは死にかゝつた鳥のやうに見える。

麥藁蜻蛉が飛んで来た。蜻蛉はかんく照りつけられて苔も何も着いて居ない飛石へ来てとまつた。そしてしばらくすると、其の暑さの中に満足らしく羽根を下げた。自分は一月程前、庭先の溝で蜻蛉の幼虫らしい醜い蟲が、不器用に水の中にもぐつて行く姿を見た。あの蟲が殻を脱けて、かうして空中を飛んで来たのであらう。此の暑さにもめげない蜻

鈴の幸福が思ひやられる。蜻蛉は秋までの長くも
 ない命を少しもあせらず、じつとして暑さを楽しんで居る。凡そ十分もさうして居た。其所に今度は
 鹽辛蜻蛉が飛んで來た。黒い影が地面を縦横に動
 いた。すると今までじつと羽根をへの字なりにし
 てゐた麥藁蜻蛉が、眼ばかりの頭をくるくると動か
 した。と思ふと、急に軽い速さで鹽辛蜻蛉を眼がけ
 て飛立つた。羽根と羽根との擦れ合ふ乾いた音が
 して、二匹の蜻蛉は追ひつ追はれつ次第に空高く飛
 んで行く。そこにはもくくとしたまぶしい夏の

雲があつた。蜻蛉は暫くの間淡い點になつて、見え
 て居たが、到頭私には見えなくなつた。(白樺の森)

二四 明治天皇の御遺物 笠井信一

先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨
 仰せ出されましたにより、私共は定刻に參内致しまし
 した。先づ權殿參拜の後、御學問所を拜觀致しまし
 た。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を
 御親裁遊ばされる處でございます。餘り廣くない
 二間續きの御室で、瀟洒たる檜の白木造ではありま

當時殿手縣知事
 たり。貴族院議
 員。
 大正二年一月。

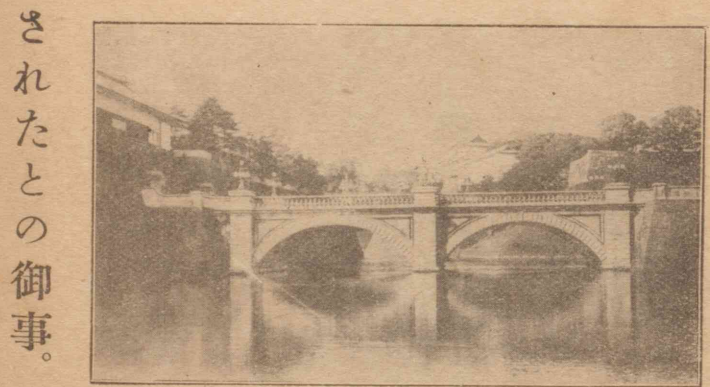
すが、別段これと申す御裝飾も施してございませぬ。御室は三方壁を以て廻らし、南の一方に硝子戸があり、御机は御座所の中央に南向に据ゑてございます。私は御室の御構造を拜觀すると同時に、夏分は嘸御暑い事でいらせられたであらうと感じました。それにつけても、

年々に思ひやれども、山水を

汲みて遊ばん夏なかりけり。

の御製を思ひ起して、恐懼に堪へませんでした。のみならず、此の御室にはストーブの御設備はござい

ますけれども、三十七年の冬以來、如何なる酷寒と雖



橋 重 二

も一切御用ひがない。これは侍従方の推測し奉る所によれば、當時皇軍が滿洲の野に大敵と戦ひ、飢寒に苦しんでゐるのに御同情を垂れさせられた次第でありませうと申すことで、そしてそれ以來は、唯一箇の小さい丸火鉢のみを御使用遊ばされたとの御事。今、その御火鉢を拜觀するにつけ

ても、思ひ出されるのは斯民の上を思ひやらせられたる御製、

桐火桶かきなでながらおもふかた、

すきまおほかるしづが伏屋を。

でございます。

次に御遺物全部が其の儘に据置かれてある御別室を拜觀致しました。構造も方向も廣さも御學問所と全く同一であつて、すべての御遺物も昨年七月十三日、即ち先帝最後の出御當時の儘に御備へ付になつてございます。床の間には其の當時の御軸物が

掛けてあり、其の前方には御劍數振横たはり、御机は中央に南面してございます。

まづ、御机は羅紗を鏡張にしたテーブルで、中程に焼痕がございます。是は先帝が御煙草を召上つて入らせられた節、臣下より政務を言上致しましたので、先帝には御吸ひかけの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聽取あらせられた折、煙草の火が墜ちて此の焼痕がついたのを、侍臣より幾度か御取換を願ひ出ましたさうでございますが、斷じて御許がなかつたとの御事。

御硯箱は明治二十年に鹿兒島縣から御取寄せになつた竹製の品でございます。そのなかの筆は普通の御品で、毛尖は禿び、軸の文字は見えないほどに御使ひふるしに成り、墨も亦同様で、一寸位にへつてをるのがございました。銚も亦同じく普通市場にある品で、其の傍に日常御用ひになつた學校生徒等用ひる普通のインキがございました。事々物々につけて御儉徳の高きに感激し、自ら顧みて慙愧に堪へなかつた次第でございます。御椅子の下に犬の皮で補修された古い獅子の毛皮が敷いてございま

す。其の傍にホワイトシャツを入れる白いボール箱が澤山に積重ねてございましたが、これは書類を入れるに便利であるとして、御手許に留め置かせられたものであるとのことでございます。

大臣方より上奏して御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れて、表に主務者の名を署して上るのださうでございますが、御親裁の後には、別の紙袋に入れて御下げになる、そして御不用になつた前の紙袋は一枚たりとも御棄て遊ばされず、それに折節御詠遊ばす御製を御認めになりますのを御側の方が別紙に拜寫して、

御歌所に御廻し申したのださうでございます。諸御次の間には造花や彫刻や種々な物が備へてございました。之を拜見いたしまするに、學校や展覽會等に行幸あらせられた節、御獎勵の爲、御持歸り、又は御買上げにならせられた物らしうございます。それ故に、造花の如きも格別のものでなく、何年前のものか、色も褪めはて、殆ど裝飾の用を爲さぬものまで、其の儘になつてございます。その他美術工藝品の如きも、皆御獎勵のためで、世の常の嗜好とは全く趣を異にしていらせられます。

○千よろづの民と偕にも楽しむに

ます樂しみはあらじとぞ思ふ。

の御心も思合されました。

今や我が國運は先帝の長き御心づくしの御蔭を以て隆々として進歩し、我等は世界一等國の民となりました。顧みれば、我等は長い間、聖天子御一人に非常なる御心勞をお掛け申し上げたのでございます。こゝに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に、國民のちからのかぎりつくすこそ

わが日の本のかためなりけれ。

の御製をも同時に服膺して、力のあらんかぎり盡し、以て我が日の本のかためのため、應分の貢獻をなし、先帝の御高恩の萬分の一に對へ奉らうと考へる次第でございます。(巖手縣學事彙報)

二五 乃木大將夫人

乃木大將が精忠無二の偉人として、兒童走卒にまで崇められると共に、夫人は貞淑並びなき烈女として千載の末までも、女性の鑑と仰がれるであらう。夫人は極めて質實勤勉な方であつた。平生物見遊

*
栃木縣那須郡。

山などは少しもせられず、儀式などの特別な場合の外には、一切絹物を身に着けられなかつた。かの西那須野の別荘に居られた時は、いつも田畑へ出られて、農夫を指揮せられるは勿論のこと、自身にも鋤鋤を執つて働かれた。食時頃訪問の客が有れば、夫人手づから豆腐汁に鱈の鹽焼といふやうな料理を拵へて饗應されるのが例であつた。「人様が來られたとて、急に變つた旨い料理を注文するのは馳走にはならぬ。總べて身分相應な物を自身にこしらへて出すのが眞の馳走である。」との姑御の教を守られた

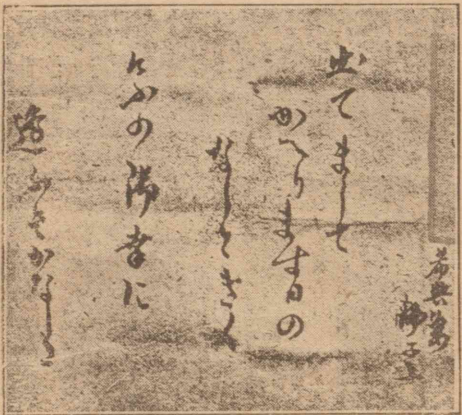
のであるといふ。そして、前掛様の物を不斷着の上に纏ひ、かひなくしく臺所で立働き、自身膳を座敷に運ばれるのを見る客は、誰でも夫人の心盡しに感ぜぬものは無かつた。



乃木夫人

夫人は、又、非常に謙遜な方で、少しも容體ぶるやうなことも無く、誰にも親切で、慈悲深かつた。殊に大將の部下の者に對しては、厚い同情を以て世話をせられたので、いづれも大將の威徳に心服する外、夫人の恩義に一方

ならず感謝してゐた。近處の商人や、其の他、出入の人々にも、留意なく手輕につき合はれるので、誰も彼



乃木夫人筆蹟

も皆よく懐き慕つてゐた。書生や下女や馬丁を呼ぶにも、決して呼捨てにされたこと無く、つひぞ荒らかに叱られたことも無い。萬事が斯ういふ風であつたから、凡そ夫人に接する人といふ人は、いづれも其の高い温かな人格に感動せぬ者は無かつた。

勝典・保典二兒の教育は、大將が身軍職にをられる關係から、家に居られないことが多いので、夫人が専ら之に當られた。武士の精神を養ふを第一とし、剛健な身體を鍛へるのを第二とし、諸般の學識を得るのを第三として、家庭教育にも學校教育にも眞心を籠められた結果、あの立派な二人を作り出されたのである。此の一點から見たゞけでも、夫人が尋常一様の女性でなかつたことが分る。

然るに、この愛兒は明治三十七八年戰役に二人とも名譽の戰死を遂げた。この時の夫人の胸中は、如何であつたらう。並の母親であつたなら、身も世もあられず、嘆き悲しんで、氣も狂つたかも知れない。然るに、夫人は吾が子の御國の御用に立つたのを喜ばれたゞけで、大將の言置かれたやうに、三棺揃はねば葬儀は出さぬと、涙一滴人に見せられなかつた。立派な武夫になれかしと神に念じ、佛に祈り、吾が手一つに育てあげた前途有望の二人の子を二人とも失つて、誰が悲しくなからう、心細くなからう。それを國を思ふより外なき大將の妻として、御國の御用に立つたと喜んで、己が悲をじつと恠へられた夫人

のけなげさは、吾が子の戦死した地點に立つて、山川草木轉荒涼とのみ口ずさんで、泣かれなかつた大將に優るとも決して劣りはせぬ。

同じ戦役中芝の琴平神社に日參して、我が軍の勝利を祈る婦人が有つた。服装の質素なに似ず風采の氣高いのと祈願に熱心なのを見て、何れ然るべき軍人の妻女ではあらうが、果してどなただらうと、神職等が密かに探つて見た。處が夫が乃木大將夫人だと知れて、皆々偕はと大に感じ合つたといふ。

谷子爵等の發起した報國會には、夫人は其の會の理

東京市芝區琴平町にあり。

谷子城。

事として働かれ、又會で恤兵の爲に襯衣を縫ふこととなつたところ、夫人は日々一所懸命に其の裁縫に勵まれた。そんな時にも、夫人は口癖のやうに「夫が旅順で澤山將卒を殺し、誠に陛下や父兄に相濟まぬ」と語られたといふことである。「愧づ、我何の顔あつて父兄にまみえん」と歎かれた大將と實に同心一體ともいふべき美談ではないか。

大將の自殺は忠魂義膽の凝固りて、夫人の殉死は良人に對する同情貞節の徹心である。これが眞に優しい、女らしい、而も凜として冒すべからざる日本

婦人の鐵石心を發揮したものである。ともすれば、
婦道の廢れようとする今日、夫人の如きは實に無上
の活教訓を示された方と謂ふべきであらう。

二六 秋の七草

萬葉集に、山上憶良が秋の野の花を詠める歌あり。

秋の野に咲きたる花を、および折り、

かきかぞふれば七種の花。

萩が花・尾花・葛花・瞿麥の花、

女郎花また藤袴・朝顔の花。

げに秋の野山に出でて見れば、
千草の花咲亂れて、いづれ優し
く麗はしからぬはなきが中に
も、この七種の花は一際目立ち
て見ゆ。或は
露にたわみ、或
は風に靡き、或
はなよやかな
るすがたに人
の憐みを惹く。



其の風情とりくに愛らし。まことに雅遊もこゝに於てし、繪畫彫刻も詩繪織物も、其の資料をこゝに取る。秋の七草は古くより我が國人の嗜好に適したるものといふべし。外國にはこの中なき花あり、又、ありても之を賞すること、深からざるが如し。

(普通植物に據る)

*著述家。
蘆花と號す。

二七 秋分

朝

徳富健次郎

今日は秋分なり。

早起、外に出づれば、白露地に満つ。稻穂・粟穂・薄の花・蘆の花、すべて露の中にあり。蟲聲水のごとく流る。

晝

彼岸の中日なれば、近在の老弱男女、藤澤に鎌倉に寺詣して歸る者織るが如し。川邊には鯊を釣る人多く並立てり。

午後の日悠悠々として、碧潮川に満ち、日光空に満ち、百舌鳥の聲耳に満つ。

夕

日は入りぬ。無花果の葉陰薄暗くなりて、芙蓉の花

も漸く凋まんとす。空に雁聲あり。十五夜に影を見せざりし月は今宵照りいでぬ。庭の眞砂、霜の置ける様に白み、樹影黒く地に涌きぬ。白萩月に映じて雪の如し。(自然と人生)

二八 まことの愛

柳 澤 淇 園

われ幼き頃より詩歌文章の道を好み、稿成れば父に見せて、添削を乞ひけり。父は一つとしてほめ給へることなくて、唯「無益の事なり」とて、座右に投捨て置き給ひぬ。さるに他の者の作れる文は褒め給へば、

*大和郡山藩士、名は里恭、諱藝、寶曆八年歿す。

「さりとはいかゞ」とのみ思ひてすごしけり。

後に、妻に迎へたる女、物縫ふこと人に優れて、小袖など一日に一重ねつつ縫ひて、餘事までも事缺かず、その道の職人の見ても驚くばかりに上手なりけり。或時、われその物縫ふを見て、めで賞しけるに、妻のいひけるは、「わらは二歳にして母を喪ひ、繼母に育てられしが、繼母はわらはの五六歳の頃より水仕の業を勤めさせ、七歳の頃より手習、讀物、裁縫を教へ給ひ、實の子ならねば教訓足らずと、末にいたりてをしられんは口惜しかるべし」とて、教へ習はしめ給ひければ、

羽根突く遊だにえせざりき。折柄には、厳しき母よ
と思ひしこともありしかど、今となりてかく人にほ
めらるゝは、偏に繼母の情によれり。といひけり。
われ聞きて、始めて、予が幼き頃の作文をほめられざ
りし事のいとも有難かりしを思ひ合せぬ。(雲萍雜誌)

二九 海上日記

水上瀧太郎

日本に通じる無線電信は、今晚でおしまひだと、電信
局の人が注意に來てくれた。「カウカイブジ」と云ふ
やうなのが、いくつもく繰返されて居るのである。

本名阿部章藏。
實業家、文學者。
大正元年十月三日。

*香川景樹。

自分も父母に、何か一言いひ送らうと思つたが、無事
といふ以外に何も無く、唯無事だけでは、あまり物足
りなさ過ぎるので、手帳を出して、あれこれと近頃の
自作の歌の中から適當なのを選ばうとした。
景樹の流れを汲んで和歌を詠まれる母は、自分達兄
弟姉妹が、時折父母の家を離れて旅にでも出た時と
か、又は母自身が家を留守にした時には、必ず、吾等に
對して、子を思ふ親の心を三十一文字に籠めて書越
されるのであつた。見やう見まねで、兄も姉も、幼い
時から歌を詠習ひ、母から送られた時には返しをす

るといふ風であつた。自分も何時かそれに倣つて、旅好きの身の旅先から強ひても母の好きさうな古風な歌を詠出でては書送るのを習とした。

丁度此の夏も、自分は拙い歌を、拙い文字に認めた驛路の繪葉書の、如何計母を慰めるか、又如何に母が誇りにかに、人々の前にそれを示すかを想像しながら、九州路の旅に日を暮した。

それこれを考へ合せて、幾度もく、短いありふれた句を手帳に書いては消し、消しては書きした後で、

ヤスラカニウミノイクヨハアケニケリ

チチハハノイヘコヒントオモヘド

として、恰も晚餐の時刻に我が家に着く様に、無線電信掛の人に頼み込んだ。

晚餐時にこれが着くと、父は、なんだつまらないと云ふ様な顔をして見られるに違ひない。しかし、その心中の嬉しさは隠さうとしても隠し切れず、見ない様な風で居ながら、電報の歌を諳んじられるに違ひ無い。母はもうたまらなくなつて、目顔に涙を滲ませながら、幾度もく、口吟んだ後、妹にも弟にも、さては女中達にまでも読み聞かせられるに違ひ無い。

明日からは、彼の家の夫人、その家の奥さん達に逢ふ
度毎に、我が子の歌を唇に上せられるに違ひ無い。
自分にはよくそれが見えるのであつた。(海上日記)

三〇 箱根路

正岡子規

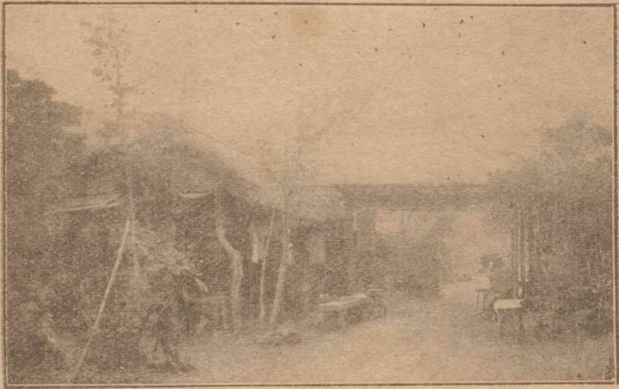
箱根路へかゝれば、何となく行脚の心の中うれしく、
秋の短き日は全く暮れながら、谷川の音耳を洗うて、
煙霧模糊の間に白雲光あり。
湯本に廻り着けば、一人の男袖をひかへて、「いざ給へ、
好き宿まるらせん」といふ。引かるゝまゝに行けば、

*名は常規。
文學者。俳句を
以て著る。俳句を
明治三十五年歿す。

いとむさくろしき家なり。前日來の病も全くは癒
えぬに、此の旅亭に一夜の寒氣を受けんは氣遣はし
く、や、躊躇したるがまゝよ、これこそ風流の眞面目、
行脚の眞面目なれと、そのまゝこゝに宿りぬ。
つぎの日まだき起き出でつ。板屋根の上の滴るば
かりに濡ひたるは、昨夜の雲のやどりにやあらん。
よもすがら雨と聞きしも、篋の音、谷川の響なりしも
のをと、はや山深き心地ぞすなる。
今日は一天晴渡りて、瀧の水朝日にきらめくに、鶴鶴
の小岩傳ひに飛び歩くは、逃ぐるにやあらん、此方へ

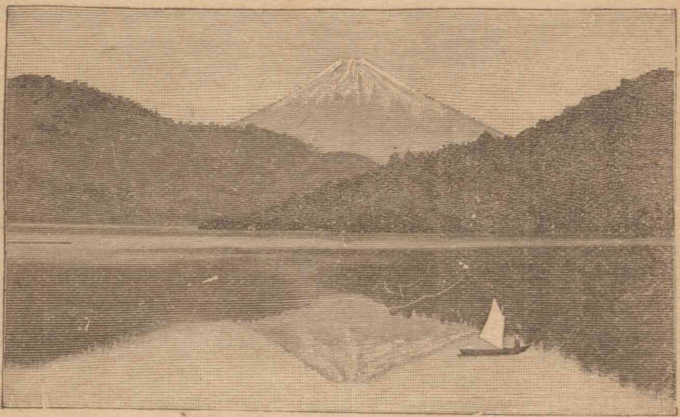
としるべするにやあらんと草鞋の運び自ら輕らかに箱根街道登り行けば鶉の聲左右にかしまし。病みつかれたる身の、一足のぼりては一息つき、一坂のぼりては巖端に尻を休む。駕籠舁の頻りに駕籠をすゝむるを耳にもかけず行けばはや二子山鼻先に近し。谷に臨めるかたばかりなる茶屋に腰掛くれば、枯皺みたる老婆の挨拶何となくものさびて面白し。打見やれば千仞の谷間より木を負うて上り來る樵夫二人三人ものもえ言はで汗を滴らすさまいとあはれなり。樵夫も馬子も皆足を茶屋にやす

むるに、それぐにいたはる老婆のなさけ、一碗の澁茶よりも猶濃し。名物ありやと問へば、力餅といふものありとて、大きな餅の焼きたるを二つ三つ盆に盛り來る。力餅の力をかりて上ること一里餘、杉、樅の大木道を夾み、元箱根の一村目の下に見えて、秋さびたるけしき、仙境に入りたるが如し。



箱根街道

幾重の嶺を攀ぢ幾片の白雲を踏みて上り着きたる
 山の頂に鏡を磨き出せる蘆の湖を見そめし時の心
 ひろさよ。餘りの絶景に恍惚としてえも立ちやら
 ず木の株クサに坐してつくぐと見れば山更に靜かに
 して風吹かねども冷氣冬の如く足もとよりのぼり
 て身にしみ渡るこゝちす。波の上を飛びかふ鶴鴿
 は忽ち來り忽ち去る。秋風に吹きなやまされて力
 なく水にすれつあがりつ胡蝶のひらくと舞ひい
 でたる箱根のいたゞきとも知らでやあらん。遙か
 の空に白雲とのみ見つるが上に兀然として現れ出



なりといふ。名を赤腹といふとぞ。

でたる富士こゝよりも猶三
 千仞はあるべしと思はるゝ
 箱箱に更に其の影を深く沈めて、
 根根さゝ波にちゞめよせられた
 蘆蘆るさままたなくをかし。
 の箱根驛にて午餉したゝむる
 湖湖に皿の上に尺にも近き魚一
 尾あり。主人誇りかにこは
 湖水の産にしてこゝの名物

これより山を下るに、見渡す限り皆薄なり。金紋先箱の行列整々として、烏毛片鎌など威勢よく振りたて、行きかひし街道の繁昌も、あはれ物の本にのみ残りて、草刈る童のゆき通ふ小道一筋を除きて、外は、草の生ひ出でぬ處もなく、纔かに行列のおもかげを薄の穂にとゞめたり。

槍立て、通る人なし、花芒。
(瀬祭書屋俳話)

五訂女子國語讀本卷一終

大正十一年一月廿八日
文部省檢定
高等女子學校國語教科書

明明明明明明大大大
治治治治治治治治治
三三三三四四正正正
三三三三四四正正正
五五五七九 十元七十八
年年年年年年年年年
一三十一 二四一 二七十一
月月月月月月月月月月
二二二 三三三 三三三
三三三 三三三 三三三
六六六 七七八 七七八
日日日日日日日日日日
初初初初初初初初初
正正正正正正正正正
版版版版版版版版版
三三四五六七八九十
版版版版版版版版版
行行行行行行行行行
行行行行行行行行行

定價	卷一、二、三、四 各金參拾參錢
定價	卷五、六、七、八、九、十 各金參拾壹錢

著者	吉田彌平
同	小島政吉
同	篠田利英
同	岡田正美
發行者	金港堂書籍株式會社 東京市日本橋區本町三丁目十七番地
代表者	原亮一郎
印刷所	東洋印刷株式會社 東京市芝區愛宕町三丁目二番地

五訂女子國語讀本 全十册

發賣所 東京市日本橋區本町三丁目十七番地
金港堂書籍株式會社
賣捌所 各府縣特約販賣所

丁酉 秋林書局

